

順正寺報

第十一号

並日 請 衆 力

順正寺住職 江口 貫照

去る二月の中程から始まりました、「順正寺増改築」の事業も完成に近付き、つくづく観ずるところを一言述べさせていただきます。

世に使われて居る言葉で、仏教用語がそのまま一般の人達の中に生活用語として生きている、そういう言葉がたくさんございます。そういう言葉の一つに「普請」という言葉があります。御承知の通り、「普請」と言うのは、「安普請」とか「良い御普請」と言うような言葉で表される通り、家を建てるというようになときに使われています。

この「普請」、本来は「普請衆力」と申しまして、お経の中に出てくる一つの熟語でございます。「普く、請う、衆々の力を」と、いう事であります。読んで字の如くで、一軒の家を建てるには、棟梁がいて、畳屋さん、左官屋さん、そして、トタン屋さんなど、色々な業種の人達がそれぞれの持ち場を持つわ

けです。そして、そういう持ち場を調和することによって、一軒の家が建っていくわけです。その、調和されて一軒の家が建って行く姿、衆々の力によって出来上がるという意味から、「普請衆力」ということなのでしょう。

本来「普請」という言葉は、人間の人格が完成されてゆく上での話として使われていたものなのです。例えば、私個人の上で申せば、今日自分があるのは親がいて、兄弟がいて、あるいは先生方がいて、また、御檀家の方々、色々な方々のお育てを被って今日の私がここに存在するわけなのです。将来も、極端に言えば命終わるまでそういう人々に支えられ、そして、育てられて自分というものが完成して行くわけです。ですから「普請衆力」というのは、仏道に励む一人の修行者、あるいは僧侶が覚りに至る道を「普請衆力」と、こう受け止めても良いのではないかと思えます。

このたび増改築を祝して、宗祖親鸞聖人の報恩講と合わせて落慶法要を営むわけですが、

これもやはり「普請衆力」のそのままの姿で行事が行われる、と、こういうことになるのです。例えば増改築に付いて申せば、初めに予算が有って、総代・世話人の方々にお集まり頂いて、協議の結果「良かろう」と言う事でスタートしました。しかし、ただ単にスタートしたからそれで終りというものでもなく、今日に至るまでの間に御檀家の方々の一人一人のご協力が有って、思わぬ方から励ましのお言葉をいただいたり、浄財を御喜捨頂いて、その結果今日のこの立派な建物に完成されてきたのです。行事もやはり同じです。単に、「この行事を行おう」ということで計画しても、そこに協力し、参加する人がいなければ行事は行事でなくなってしまうのです。十一月の行事に關しても、総代・世話人の方々がそれぞれの役目分担を決め、住職・副住職・坊守・衆徒も含め、全員が十一月八日の行事に向かつて、それぞれの力を合わせてこそ初めて行事として執行される、と、こういう訳です。同時にまた、こういう裏方の協力をする人ばかりでなく、そこに参詣する人が当然

一番大きな要素となってそんざいするわけですから。どんなに立派な行事だと自己満足しても、そこに参加する人がいなければ『絵に描いた餅』と、こういう形になってしまうのです。

前にあるお寺の報恩講に招かれ出向いたことがあるのですが、その時、大変立派な、大きな御本堂の中で、お勤めがあり、いざお説教という段になり、壇上に立って実に寒々とした気持ちに襲われたことがあります。それは、これだけの立派な本堂を構えたお寺なのに（公称、御檀家五千軒というほどの大きなお寺なのですが）参詣の方が十余人にも満たなかったのです。本堂の内陣で勤まったお経は、法中ほうちゆうの方三十人くらいが集まり、厳かに勤まったのですが、その時ですら同じようなものであったようです。ましていわんや、お説教の時間になるともうほとんどの参詣人は席を立て帰ってしまっていました。そういう状態の中で、一つの報恩講という意義ある行事が、単に年中行事の一つにすぎないというような形で、流されるような形で終わってしまったのです。大変、親鸞聖人に対して、

申し訳のないことじゃないかなと感じました。

ただし、必ずしも人が集まれば良いというものでもなく、やはり、そこに信が燃え盛っているというか、念仏に対するお志をみんなが運び、そして燃え盛っている、そういう感じがあってこそ念仏が生きているお寺といえるのではないでしょう。そういう事から申せば、我が順正寺は、私がこの地で開教してからの目標であった、『石神井での念仏道場』という念^{ねん}いが今ここに具現しておる。(形にはつきりと現れている。)そういう事で喜びの涙にくれるようなわけです。

「普請衆力」。真に、私が偉くて、私が立派でこう成ったわけではなくて、妻、子、そして、兄と弟、そういう人々の色々な念いに支えられて、亡き母も『照覧あれ』と言いたいくらいの憶いに駆られるのです。

今、私を育てて下さった皆さんの念^{ねん}いが、ここに結実して一つの形を取って下さった。それこそが『普請』であると受け止めております。

△口 当手

副住職の独り言(番外編)

順正寺副住職 江口 貫正

秋です。読書にスポーツに食欲の秋です。あちこちで運動会が行われています。でも私は子供の頃、運動会が嫌いだった。出来れば、病気に成って休みたかった。けど、病気になれなかった。結局、流されるままに九年間運動会に参加してしまっただ。ついでに思い出したが勉強も嫌いだった。それでも当時の学校には居場所があったんだろうな。今の子供は皆と何から何まで一緒じゃないと居場所もないのではないだろうか。

先日、甥を二人連れて近所の石神井公園へ行くのと、整備されて綺麗になっている。綺麗なのは良いけれど、あらゆるところにフェンスや柵ができて、歩道として決められた所しか入れない。最近、公園にくる人も増えて、ほっとくと森や林の下生えが駄目になってしまふからだろうけど、何かこう、企画通りってのは、つまらないもんです。

その反面、これも先日、ほっといた為に、ある名水のである井戸が封鎖されました。原因は水を汲みにくる人のマナーの悪さ。これは何処でも同じで、石神井公園も例外ではない。

要は、管理が先か、管理しなければどうにもならない恥知らずをどうにかするのが先かってとこですか。

了

『知日流』

順正寺衆徒 江口 知日流

今日は。私がこの寺報の編集長です。と、申しましたも編集員は私一人だけです。

さて、表題を御覧下さい。『智流』。何とづうづうしい題でしょう、自分の名前です。これだけを取って、私がいかに我執の強い男かお解りになるでしょう。『智流』。どう読むか解りますか。今までにちゃんと読めた人は滅多にいません。たいてい『ちりゅう』と読まれます。本当は『さとる』と読みます。自分が目標としている人物像がこの名に現されているのです。

高校一年の個人面談のとき、いよいよ私の番。皆、一時間近く説教されている。教室に入る。そして担任と相対して座った、その瞬間、『貴様は名前負けしとる!』第一声が。「ほっといてくれ。いきなり何言うかと思つたら、どっかネジ外れてんじゃないのか」などと思いつつ顔をあげると、目と目があつてしまった。じつと見詰めてる。おかしい。笑いそうだ。その時とどめの一言。切実と『先生は悲しい。。。』。もう駄目です。笑いを堪えるのが精一杯。何を言われてもおかしくてたまらない。とにかく我慢だ。じつと下を向き、歯をくいしばり、震える腿をきゅっと握み、と、その時、私のその姿を見て何を勘違いしたのか担任は『もういい。お前も解つたようだな。先生も言い過ぎた。そう落ち込むな。』その一言で終り。私だけ十分ぐらいで面談が終つてしまつたのです。何が幸いするやら。。。。。

いきなり関係ない話に飛びました。本題に入ります。「智流」と言う名前にはとても多くの意味が有り、親の私に対する深い念いがある中にもあります。先ず、『智』の文字は、一般的な意味での知恵を現すと同時に、仏の智慧、阿彌陀の智慧、阿彌陀から掛けられた智慧をあらわしている。この智慧が『流』の文字にかかつて展開するわけです。

『流』。これがまた非常に深い意味が有り、次から次へと湧き出る。常に川の水のように流れることで清浄化がされる、一つのところに止まり動けなくなるようなことなく。五体に流れ込む。先より受け継ぎ、次代に渡して行く。ちょっと考えただけでもこれだけあります。もっともっと深い意味があるようです。授けられた智慧が五体をへ巡り、常に新しい智慧が湧きいで、器がいっぱいにならないように流しだす。(つまり、決められた器で止まらない事)『常』という事も、『動』という事も、『無』・『無限』と言う事までも含まれた上での『智慧の流れ』。

きつい名前です。でも、自分の名前の中に人間の真実の姿がある気がするのです、最近。
あっ!縛られてる、名前に。
《つづく》

①177 東京都練馬区石神井町3の17の4

03 (3996) 2064

順正寺